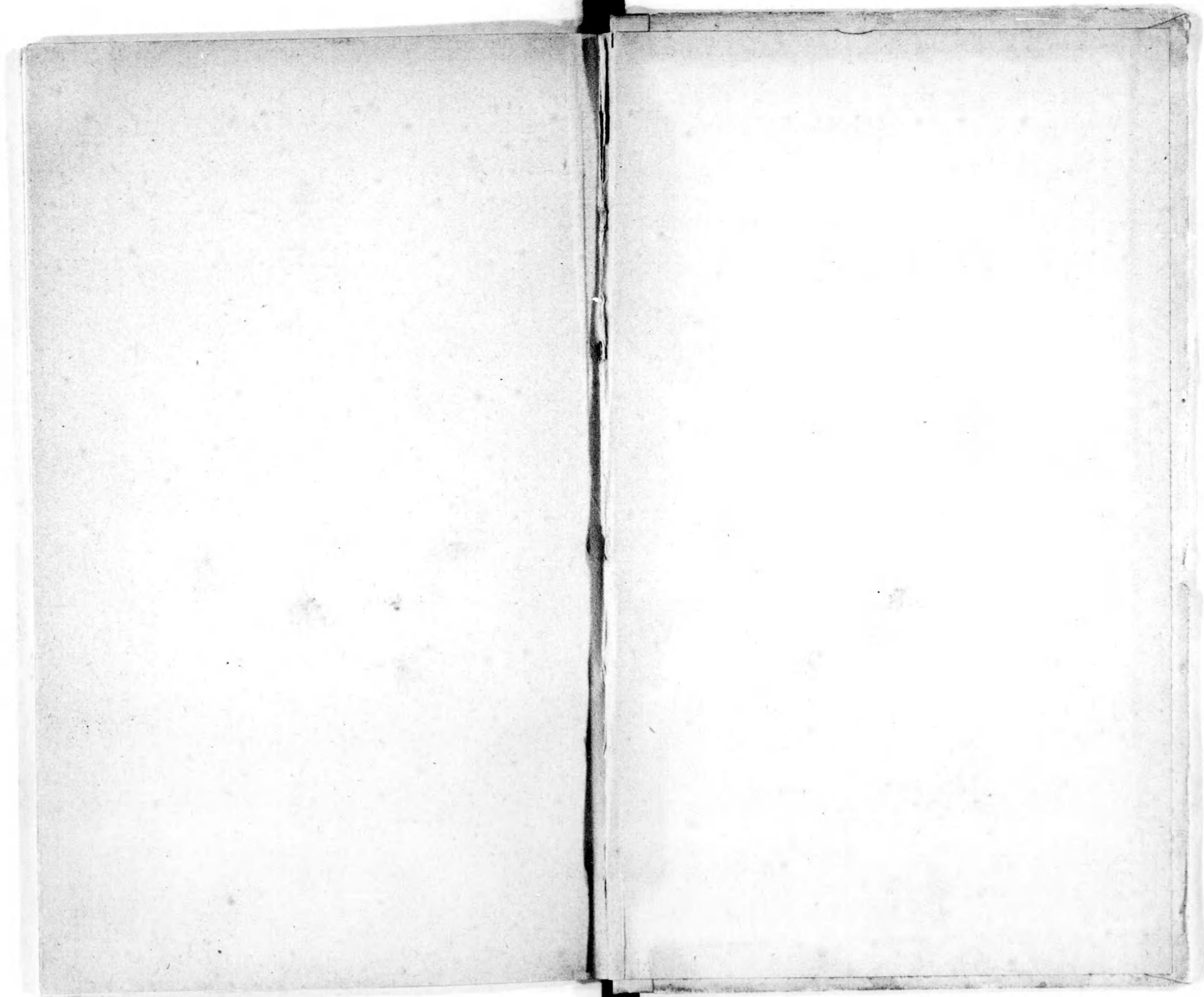


始



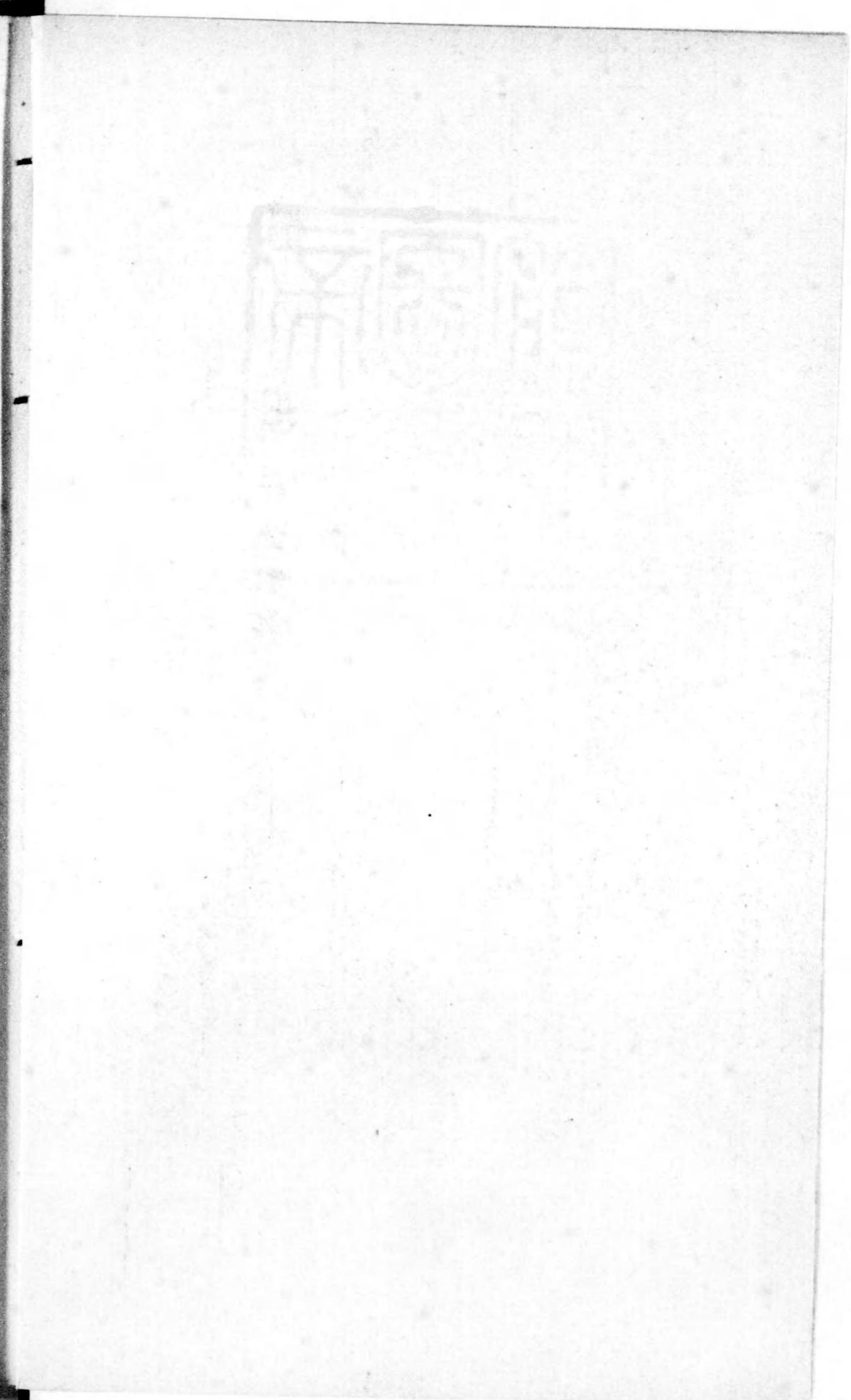
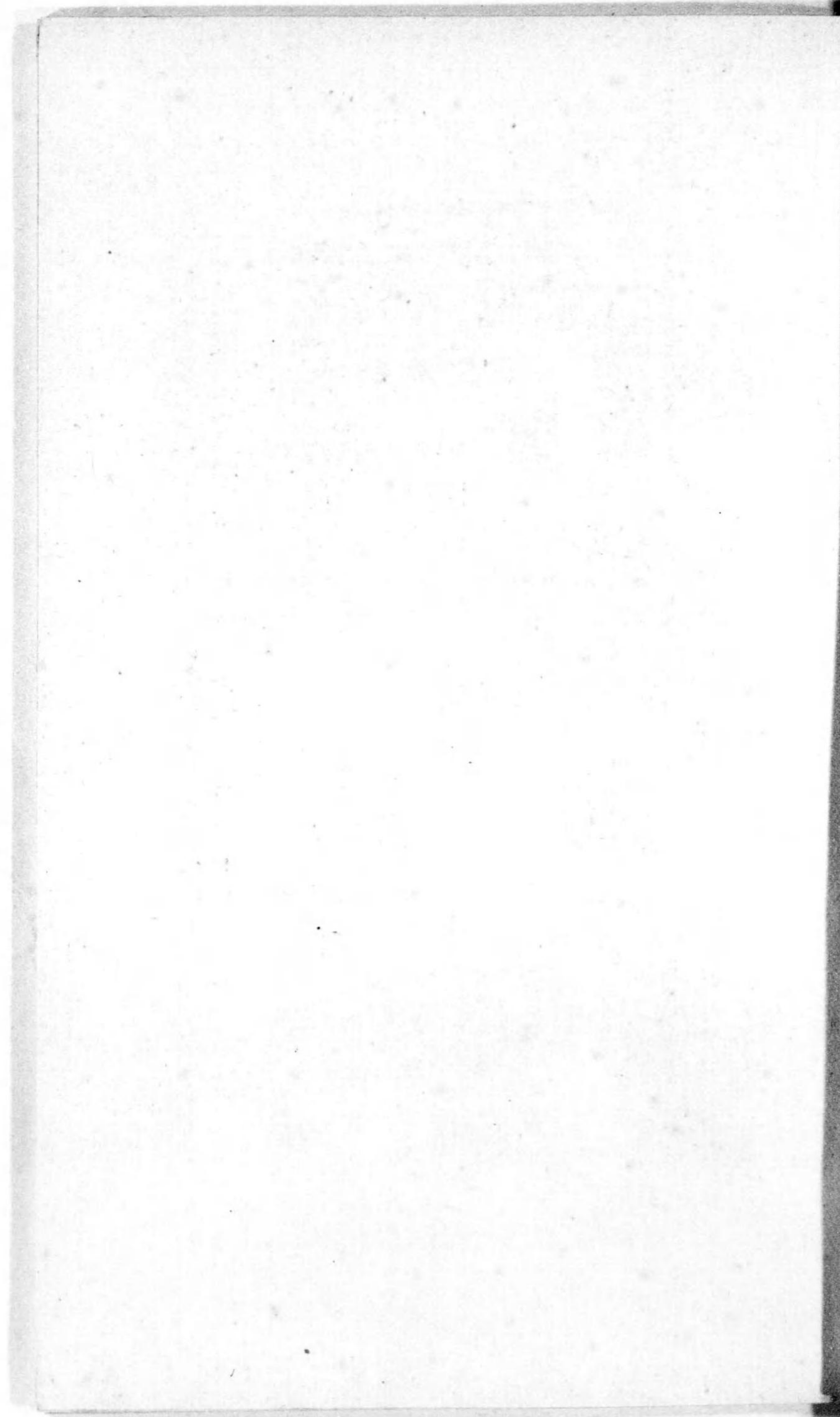
~~272~~
~~485~~





桐の花
抒情歌集





特102
343

抒情歌集
桐の花
著及畫
北原白秋

東京
東雲堂

大正
2.2.8
内交

わがこの哀れなる抒情歌集を誰にかは献げむ
はらからよわが友よ忘れえぬ人びとよ
凡てこれわかき日のいとほしき夢のきれはし

Tonka John



ラテスカと花の桐

27.V.10

桐の花とカステラの時季となつた。私は何時も桐の花が咲くと冷めた
吹笛の哀音を思ひ出す。五月がきて東京の西洋料理店の階上にさはや
かな夏帽子の淡青い麥稈のにはひが染みわたるころになると、妙にカス
テラが粉つぼく見えてくる。さうして若い客人のまへに食卓の上の薄い

フラスコの水にちらつく桐の花の淡紫色とその暖味のある新しい黄色さがよく調和して、晩春と初夏とのやはらかい氣息のアレンジメントをしみじみと感せしめる。私にはそのばさばさしてどこか手さはりの溢いカステラがかかる場合何より好ましく味はれるのである。粉つぼい新らしさ、タッチのフレッシュな印象、實際さじ觸つて見ても懐かしいではないか。同じ黄色な菓子でも飴のやうに滑すべつこいのはぬめぬめした油繪や水で洗ひあげたやうな水彩畫と同様に近代人の繊細な感覺に快い反應を起しうる事は到底不可能である。

新様の佛蘭西藝術のなつかしさはその品の高い鋭敏な新らしいタッチの面白さにある。一寸觸つても指に付いてくる六月の棕梠の花粉のやうに、月夜の温室の薄い硝子のなかに、絶えず淡緑の細花を顫はせてゐるキンギン草のやうに、うら若い女の肌の弾力のある軟味に冷々こにじみいつる夏の日の冷めたい汗のやうに、近代人の神經は痛いほど常に顫へて居らねばならぬ。私はそんな風に感じたいのである。

*

短歌は一箇の小さい緑の古寶玉である、古い悲哀時代のセンチメント

の精^{エツキ}である。古いけれども棄てがたい、その完成した美しい形は東洋人の二千年來の悲哀のさまざまな追憶^{おもひで}に依てたとへがたない悲しい光澤をつけられてゐる。その面には玉蟲のやうな光やつつましい杏仁水のやうな匂乃至一絃琴や古い日本の笛のやうな素朴なTiedtのリズムが動いてゐる。なつかしいではないか、若いロセツチが生命の家のよろこびを古いソネットの形式に寄せたやうに私も奔放自由なシムフォニーの新曲に自己の全感覺を響かすあとから、寥しい一絃の古琴を新らしい悲しい指ささきでここちよく爪弾したところで少しも差支へはない筈だ。

市井の俗人すらその忙がしい銀行事務の折々には一鉢のシネラリヤの花になにとはなきデリケエトな目ざしを送ることもあるではないか。私はそんな風に短歌の匂に親しみたいのである。

*

その小さい緑の古寶玉はよく香料のうつり香の新しい汗のにじんだ私の掌にも載り、ウイスキイや黄色いカステラの付いた指のさきにも觸れる。而して時と處と私の氣分の相違により、ある時は桐の花の淡い匂を反射し、また草わかばの淡緑にも映り、或はあるかなきかの刺のあとか

ら赤い血の一滴をすら點せられる。

私は無論この古寶玉の優しい觸感を愛してゐる。而已ならず近代の新しいそして繊細な五官の汗と静ころなき青年の濃かな氣息に依て染々とした特殊の光澤を附加へたいのである。併し私はその完成された形の放つ深い悲哀を知つてゐる。實際完成されたものほごかなしいものはあるまい、四十過ぎた世帯くづしの仲居が時折わかい半玉のやうなデリケートな目つきするほごさびしく見られるものはない。わかい人のこころはもつと複雑かぎりなき未成の音樂に懂がれてゐる。マネにゆき、ドガ

にゆき、ゴオガンにゆき、アンドレエエフにゆき、シエラトウス、ボオドレエル、ロオデンバッツハの感覺と形式にゆく。かの小さな^{エプロウド}綠玉の古色は私がそれらの強烈な色彩の歡樂に疲れたとき、やるせない^{たましひ}魂の餘韻を時としてしんみりと指の間から通はすだけの事である。即かりそめの病に飲む一杯の古いシャンペンの味である。

*

私の哀しい Nostalgia がまた一絃の古琴にたまたま微かな月光の如くつかずはなれず付纏ふ時に、ある若い人達の集團はこれを唯一の樂器と

して、行往座臥、凡ての清新な情緒センチメントと凡ての苦い神経の悦樂とを委ねて満足してゐる。新人の悲哀は古い詠嘆の絃にのぼせて象徴の世界を觀照すべくあまりに複雑であり深刻であり而かも而かも傷ましいほど痛烈である、わが友よ、古い器樂の悲哀を知れ。さうしてその幽かな哀調の色に執し過ぎて些かだにその至醇なる謙讓の美德を傷つくるな。

ある時はビーヤホールのかたかげにその慎しい音色を懐かしむこともある。しかし私には白晝夏の光のふりそそぐ日比谷公園の音樂堂の上に、凡ての満足と充實した凡ての生の歡喜とを以てその古琴獨奏の矜

を衆人の目前に曝すだけの勇氣はない。それはあまりに無慘である。新人よ、汝の意の趣くままに、汝の心境の移りゆくままに、ある時は新しい戯曲に、小説に、パントマイムに、秋の日はかないロマンスに、太掉に、匈牙利古曲に、ピアノソロに、或は管絃樂オケストラの高き調にゆき、銀笛を吹き、道化した面して弄玩品おもちゃの鐵琴をもちたたけ。さうして時々その古い一絃の古琴のうへに疲れたる汝の柔軟しなやかな白い手をさしのべよ。遊び盡くした小鳥の日暮れて古巢の梢にかへるやうに、日光と快樂とに倦んだ心のさみしい燈心草の陰影をもとめるやうに。

古い小さい緑玉は水晶の函に入れて戟刺の鋭い洋酒やハシツシユの罫のうしろにそつと秘藏して置くべきものだ。古い一絃琴は佛蘭西わたりのピアノの傍の薄青い陰影のなかにたてかけて、おほかたは静かに眺め入るべきものである。私は短歌をそんな風に考へてゐる。
さうして眞に愛してゐる。

私の詩が色彩の強い印象派の油繪ならば私の歌はその裏面にかすかに

動いてゐるテレピン油のしめりであらねばならぬ。その寂しい濕潤が私のこころの小さい古寶玉の緑であり一絃琴の瀟洒な啜り泣である。
私の新しいデリケエトな素朴でソフトな官能の餘韻はこの古い本來の哀調の面目を傷けぬほどの弱さに常に顫へて居らねばならぬ。
而してしみじみと桐の花の哀亮をそへカステラの粉つばい觸感を加へて見たいのである。

單なる純情詩の時代は過ぎた。私らはシムブルな情緒そのものを素朴

な古人のやうに詠歎することに最早や少からぬ不満足を感じる。赤子の如く凡てをフレッシュに感ずる心はまた品の高い文明人の濫いアートに醇化されねばならぬ。私は涙を惜しむ。何らの修飾なく聲あげて泣く人の悲哀より一木一草の感覚にも静かに涙さしぐむ品格のゆかしさが一段と懐しいではないか。實際、思ふままのこころを擧げてうちつけに搔き口説くよりも、私はじつと握りしめた指さきの微細な觸感にやるせない片戀の思をしみじみと通はせたいのである。

鳴かぬ小鳥のさびしさ……それは私の歌を作るとき唯一無二の氣

分である。私には鳴いてる小鳥のしらべよりもその小鳥をそそのかして鳴かしのめるまでにいたる周囲のなんとなき空氣の促へがたい色やにほひがなつかしいのだ、さらにまだ鳴きいでぬ小鳥鳴きやんだ小鳥の幽かな月光と草木の陰影のなかに、ほのかな遠くの檜の花の甘い臭に刺戟されてじつと自分の悲哀を凝視めながら、細くて赤い嘴を顫してゐる氣分が何に代へても哀ふかく感じられる。私は如何なるものにも風情ある空氣の微動が欲しい。そのなかに桐の花の色もちらつかせ、カステラの手さはりも匂はせたいのである。

私の歌にも欲するところは気分である、陰影である、なつかしい情調の吐息である。……*

(小さい藍色の毛蟲が黄色な花粉にまみれて冷めたい亞鉛のベンチに匂つてゐる……)

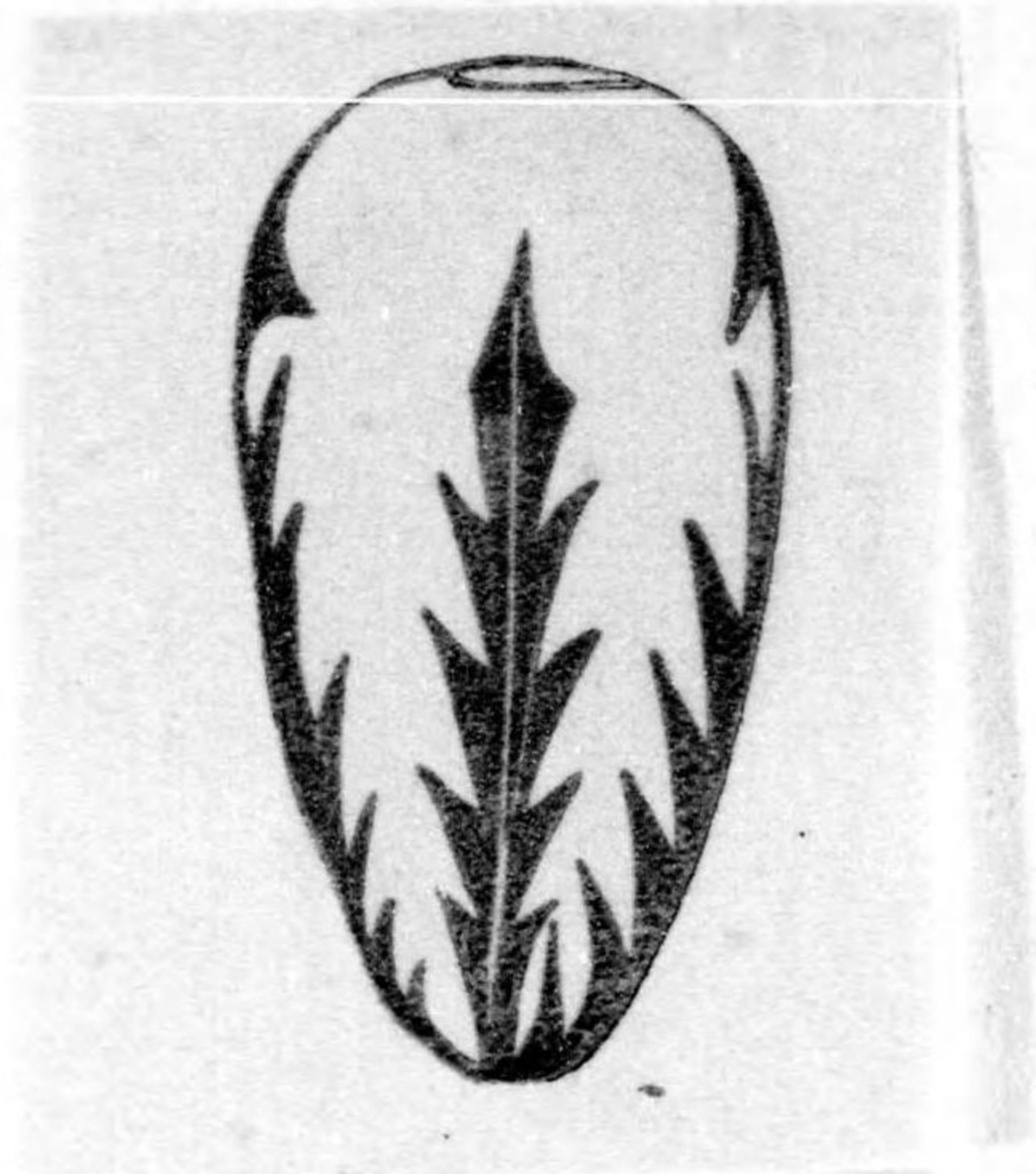
私は歌を愛してゐる。さうしてその淡綠色の小さい毛蟲のやうにしみじみこの私の気分にまみれて、拙いながら真に感じた自分の歌を作つて

ゆく……

*

五月が過ぎ、六月が来て私らの皮膚やわらかに柔軟かなネルのレスタラントにはひがやや熱く感じられるころとなれば、西洋料理店の白いテエブルクロスの上にも紫の釣鐘草と苦い珈琲の時季が来る。

私はこのいつもの詩のやうになつた *Herb* を植物園の長い薄あかりのなかていまやつと書き了へたところだ。



銀笛哀慕調

I 春

一

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草
に日の入る夕

二

銀笛のごとも哀しく單調に過ぎもゆきにし夢
なりしかな

しみじみと物のあはれを知るほどの少女となりし君とわかれぬ

五

いやはてに鬱金ざくらのかなしみのちりそめ
ぬれば五月はきたる

葉がくれに青き果を見るかなしみか花ちりし
日のわが思ひ出か

六

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心願ひ
そめし日

七

かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふひ
この春のまなざし
君を見てびやうのやなぎ薫るごとき胸むねさわぎ
をばおぼえそめにき

八

南風モウバツサンがをみな子のふくら脛吹く
 よき愁吹く
 南風薔薇ゆすれりあるかなく斑猫飛びて死ぬ
 る夕ぐれ

九

凋れゆく高き花の香身に染みつ貧しき街の春
 の夜の月
 寝てきけば春夜のむせび泣くごとしスレート
 屋根に月の光れる

十一

ゆく春のなやみに堪へて
鶯も草にれむれり

たんぽぽに誰がさし置きし三すぢほご日に光
るなり春の三味線

十二

ゆく水に赤き日のさし水ぐるま春の川瀬にや
ますめぐるも

白き犬水に飛び入るうつくしさ鳥鳴く鳥鳴く
春の川瀬に



十三

一匙ひとさじのココアココアのにはひなつかしく訪おとふ身みとは
知らしたまはじ

黒耀くわいの石いしの釦はたんをつまさぐりかたらふひまも物
をこそおもへ

薄あかき爪のうるみにひとしづく落ちしミル
クもなつかしと見ぬ

寂しき日赤き酒取りさりげなく強ひたまふに
ぞ涙ながれぬ

十四

あまりりす息もふかげに燃ゆるときふと唇は
さしあてしかな

くれなるのにくき唇あまりりすつき放しつ
君をこそおもへ

十五

はるすぎてうらわかぐさのなやみよりもえい
 づるはなのあかきときめき
 くさばなのあかきふかみにおさへあへぬくち
 づけのおとのたへがたきかな

わかきひのものといきのそこここにあかき
 はなさくしづこころなし
 ゆふぐれのとらあつめたるもやのうちしづか
 にひとのなくねきこゆる

十六

淺草にて

ゆく春の喇叭の囀はな子し身にぞ染む造花つくはなちる雨の
日の暮

ああ笛鳴る思ひいづるはパノラマの巴里パリの空
の春の夜の月

十七

美しくしき「夜」の横顔を見るごとく遠き街まち見て心
ひかれぬ

薄暮たそがれの水路すゐろに似たる心ありやはらかき夢のひ
とりながるる



十八

そぞろあるき煙草くゆらすつかのまも哀かなしか
らずやわかきラムボオ

けふもまた泣かまほしさに街まちにいで泣かまほ
しさに街よりかへる

やはらかきかなしみきたるジンの酒とりてふ
くめばかなしみきたる

ナイフとりフオクとる間もやはらかに涙なが
れしわれならなくに

にほやかに女の獨唱ツの沈みゆくこころにかな
し春も暮るれば

ウイスキーの強くかなしき口あたりそれにも
優マして春の暮れゆく

十九

夜會のあま

かくまでも心のこるはなにならむ紅き薔薇か
酒かそなたか

二十

春日笛のごとし

すすろかにクラリネットの鳴りやまぬ日の夕
ぐれとなりけるかな

にほやかにトロムボーンの音は鳴りぬ君と歩
みしあとの思ひ出

II 夏

郷里柳河に歸りてうたへる歌

一

疲れたる園に踏み入りたんぼぼの白きを踏め
ば春たけにける

二

夕暮はへりオトロウブ、
そこさなく南かぜふく

やはらかに髪かきわけてふりそそぐ香料のご
と滲^しみるゆめかも

三

哀調一首

きりはたりはたりちやうちやう血の色かひの棺衣かひぎ
織るとか悲しき機はたよ

四

ロンドンの悲しき言葉耳にあり花赤ければ命
短し

いと高き君がよき名ぞ忍ばるる赤きロンドン
赤きロンドン

狂ほしく髪かきむしり晝ひねもすロンドンの
紅をひとり凝視むる

縫針の娘たれかれおとなしくロンドンの花を
踏みて歸るも

ロンドンは松葉牡丹の柳河語なり



五

枇杷の木に黄なる枇杷の實かがやくとわれ驚
きて飛びくつがへる

枇杷の實をかろくおとせば吾^わ弟^{あに}らが麥藁帽に
うけてけるかな

六

潜^すケエツグリのあたまに火の點^ちいた、
潜^すうんだら消えた

吾^わ弟^{おき}らは鴉^{には}のよき巢^ねをかなしむと夕かたまけ
てさやぎいでつも

六

Gonshan, Gonshan, 何處へいた、
きのふ札所^{ふだしょ}の巡禮に

馬鈴薯の花咲き穂麥あからみぬあひびきのご
と岡をのぼれば



黒鶇^{くろつぐみ}野邊にさへづり^{たうざら}唐辛子^しいまし花さく君は
いづこに

燕^{つばさ}コツキリコ、哇道^{わどう}やギリコ

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬもろこ
し^{はた}畑の黄なる月の出

III 秋

一

人のこひしき
日の光金^カ絲^リ雀^ヤのごとく顫ふとき硝子に凭^よれば

二

啄^き木^つ鳥^きの木^つつき了^おへて去^きりし時^お黄^きなる夕^き日^ひ
 に音^ねを絶^たちしとき

雲^きあかく日^ひの入^いる夕^き木^ぎ々^ぎの實^じの吐^き息^きにうもれ
 鳴^なく鳥^{とり}もあり

三

あかあかと五^ご重^{じゆう}の塔^{たつ}に入^い日^ひさしかたかげの闇^{やみ}
 をちやるめらのゆく

かかる時^{とき}地^ぢ獄^{ごく}を思^{おも}ふ、君^{きみ}去^きりて雲^{くも}あかき野^の邊^へに
 煙^{けむり}渦^ままく

IV 冬

一

十一月北國の旅にて三首

妻崎の白きペンキの驛標に薄日のしみて光る
さみしさ

柿の赤き實、旅の男が氣まぐれに泣きて去いにき
 と人に語るな

たはれめが青き眼鏡のうしろより朝の雲を透
 かすまなざし

二

久留米旅情の歌

日も暮れて櫛はじの實採さりのかへるころ廓くわわの裏をゆ
 けばかなしき

三

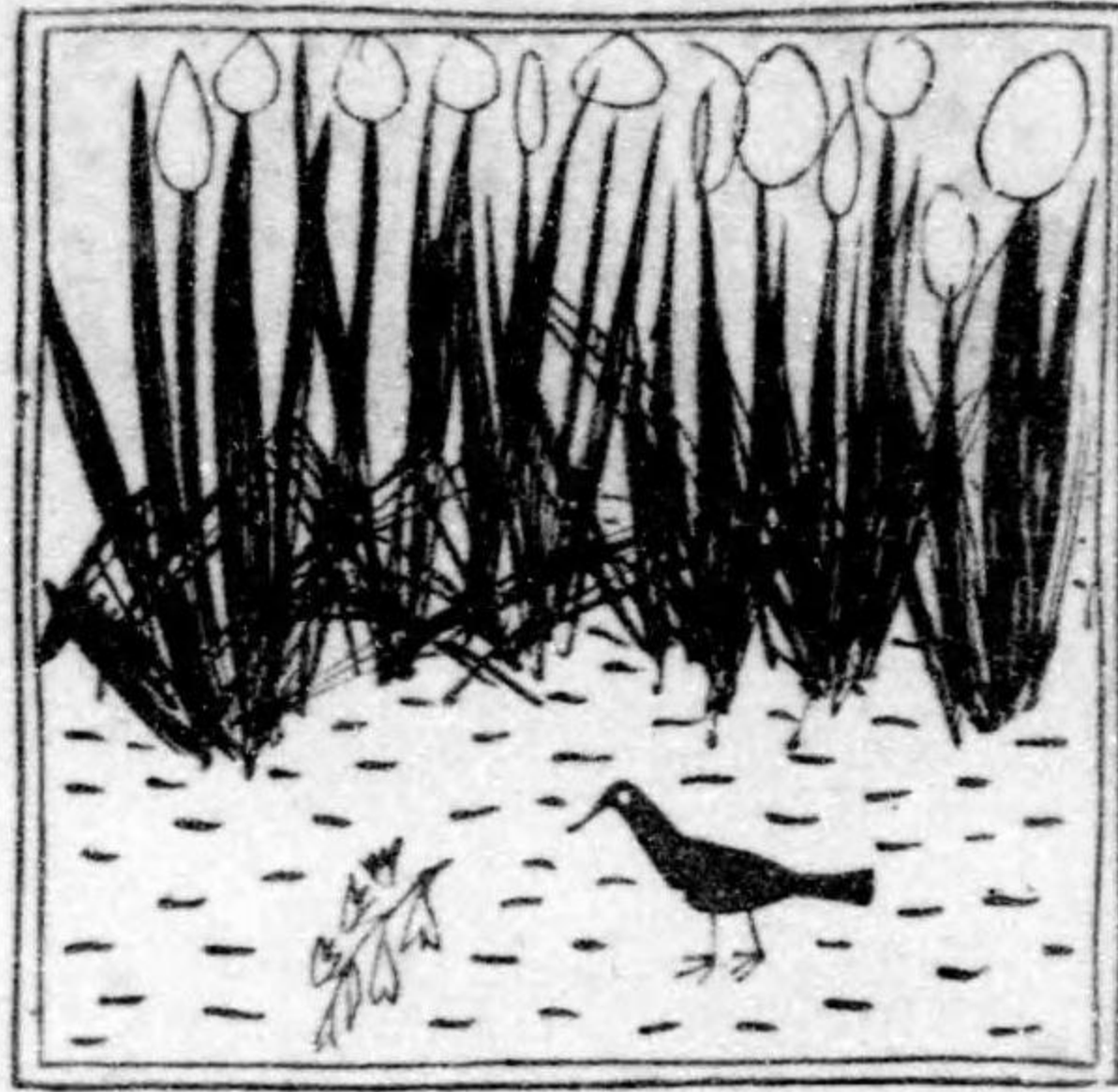
猫やなぎ薄紫に光りつつ暮れゆく人はしづか
にあゆむ

水面みづゆく權ごんのしづくよ雪あかり漕みげば河風身
に染みわたる

四

雪のふる夜昔ながらの蠟燭の裸火にうつ
し出されし團藏の仁木の妻さよ

わが友は仁木の顔に面おもてあかりさしつけながら
花道をゆく



春晚夏初

I 公園のひごこき

一

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣か
まほしけれ

二

山羊の乳と山椒のしめりまじりたるそよ風吹
いて夏は來りぬ

指さきのあるかなきかの青き傷それにも夏は
染みて光りぬ

三

草わかば黄なる小犬の飛び跳ねて走り去りけ
り微風の中

草わかば踏めば身も世も黄に染みぬ西洋辛子
の粉を花はふり撒く

こころもち黄なる花粉のこぼれたる薄地のセ
ルのなで肩のひと

草に寝ころべ、草に寝ころべ

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝
て削るなり

四

夕されば棕櫚の花ぶさ黄に光る公園の外そとに座
る琴こゝろ弾ひ者き

II 郊外

一

田舎なかや家に中風病みのわが小父おぢが赤き花見る春
の夕暮

二

きさくなる蜜蜂飼養者が赤帯の露西亞の地主
に似たる初夏

あまつさへ赤き花ちり小馬嘶く農家の白日に
なげき入りぬる

三

ほそぼそと出臍の小兒笛を吹く紫蘇の畑の春
のゆふぐれ

太葱の一莖ごとに蜻蛉ゐてなにか恐るるあか
き夕暮



III 庭園の食卓

青き果のかけにわれらが食卓をしつらへよ、
春を惜むわかき日のこころよ

一

あひびきの朝な夕なにちりそめしう爵こ金んざくら
の花ならなくに

二

サラダとり白きソースをかけてましさみしき
春の思ひ出のため

さくらんぼいまださ青に光るこそ悲しかりけ
れ花ちりしのち

三

青き果^みのかげに椅子よせ春の日を友と惜めば
薄雲のゆく

酒注^つげば黄なる薄雲桐の木の間に見えて
夏は來にけり

四

かなしげに春の小鳥も啼き過ぎぬ赤きセエリ
 ーを君と鳴らさむ

燕つばめ、燕、春のセエリーのいと赤きさくらんぼ啣くはえ
 飛びさりにつけり

五

ああ五月さつき螢匍はひいでヂキタリス小ちさき鈴ふる
 たましひの泣く

金口きんぐちの露西亞煙草のけむりよりなほゆるやか
 に燃ゆるわが戀

六

やはらかに誰が喫^のみさしし珈琲^{コホ}ぞ紫の吐息ゆ
 るくのぼれる
 よき椅子^{いす}に黒き猫さへ来てなげく初夏晩春の
 濃きココアかな

七

蟾蜍^{ひきがへる}が出て来た、皆で寄つてたかつて胡椒
 をふりかけたり、スープを飲ませたりした

しろがねの小さき匙もて蟾蜍^{ひきがへる}スープ啜るもさ
 みしきがため

八

干葡萄ひとり摘み取りかみくだく食後のほご
をおもひさびしむ

カステラの黄なるやはらみ新らしき味ひもよ
し春の暮れゆく

九

晝餐^{ひるげ}ごきはてしさびしさ春の日も紅茶のいろ
に沈みそめつつ

まひる野の玉葱の花紫蘇の花かろく哀^{かな}しみ君
とわかるる

IV 春の名残

一

一九一〇暮春三崎の海邊にて

いっしかに春の名残となり
にけりこんぶ昆布干場ほしほの
たんぽぽの花

寢てよめば黄なる粉つく小さき字のロチイな
つかしたんぽぼの花

春愁極りなし

野薊に觸れば指やや痛し汐見てあればすこし
眼いたし

洋妾の長き湯浴をかいま見る黄なる戸外の燕
のむれ

ふはふはとたんぽぼの飛びあかあかと夕日の
光り人の歩める

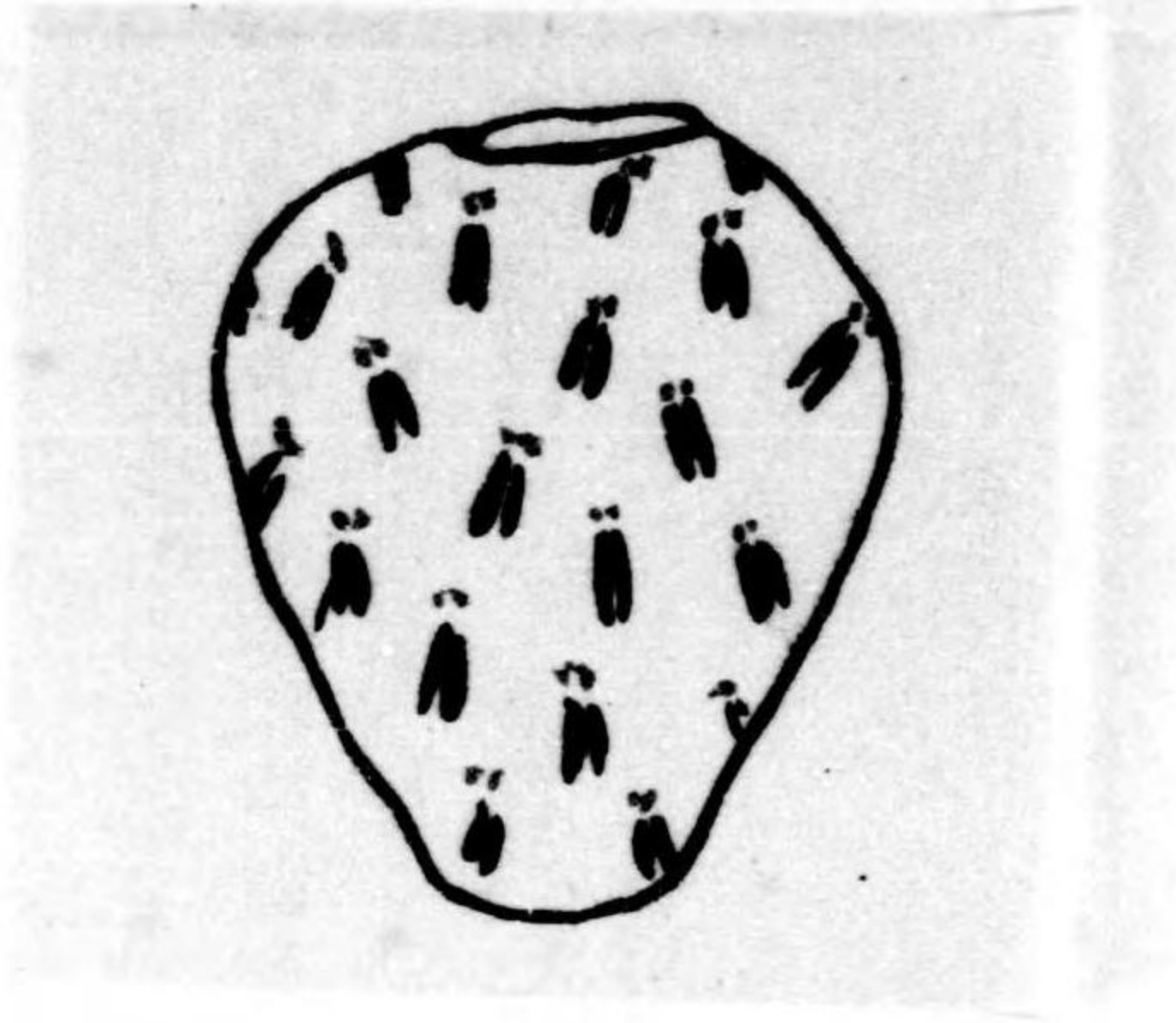
三

乳のみ兒の肌のさはりか三さんの絃いとなするひびき
か春のくれゆく

魔法つかひ鈴すず振ふり花はなの内うち部に泣く心地こそすれ
春の日はゆく

四

「春」はまたとんぼがへりをする兒らの悲しき頬
のみ見つつかへるや



思の晝

六月が来た、なつかしい紫のチキタリスと苦い珈琲の時節、赤い土耳
古帽の螢が萎え、憂鬱な心の蟾蜍かへるがかやつり草の陰影かげから啼き出す季節
——而してやや蒸し暑くなつたセルのきものの肌けだ觸りさへまだ何となく
棄て難い今日此頃の氣情けだるい快さに、ふつくらと軽いソファに身を投げ
かけて、物憂げに煙草をくゆらし、女を思ひ、温かい吐息と、眞晝マダ

ネシヤの幻光の中に幽かな黄昏の思想を慕ひ恍惚の薄明を待つわかい男の心ほご惱ましいものはあるまい。

零時二十三分、日の光はヴェニス模様の色硝子を透かして窓掛の浮織を惱まし、人も居ない珈琲店の空椅子には、今恰度真白な猫がまるで乳酪の塊のやうにとろみかけてゐる。而して誰が喫みさしたのか、眩ばゆい食卓の一角から軟らかな珈琲の吐息がたちのぼる。

珈琲、珈琲、ひとりでにわれとわが心の匂を温め乍ら、やはらかな紫

のいろにたちのぼるその吐息、病ましい物思の何とも捉へごころのないやうなその香煙の縋れを、懈怠た身の起伏に何といふこともなく眺めやる晝の男の心持、また逃げてゆく「時」のうしろでも恍惚と空に凝視むる心持……

ゴッホの狂ほしい外光の痛さ、ゴウガンの粗い生そのものの調色、或はマチスやピガソ、物を角に見るキユピストの新らしい神経の觸覺よりもかういふ日の疎ましい懈怠ものの心にはあのルノワアルなどのふくよかな色の温味と惱ましい息づかひの魅力、さうしたものの美しさがどれ

だけ豊醇な親しさと懐かしさをおぼえさせてくれるか知れない。

珈琲の煙はまだ消えもやらずにたちのぼる。やや疲れたらしいやうなロオデンバッツハの物おもひ、美しい寶石商人の溜息、ボオドレエルの苦笑ひ、或はレニエ、サマンの曇りと優しみ、それらを一つにしてたちのぼるわが珈琲の匂の強さ、なつかしさ、心もとなさ、苛々しさ……何よりも藝術の粹を慕ふ私の心は渾然としたその悲念の溶まじさに譯もなく苛められ、魅せられ、ひき包まれ、はたまた泣かされる。さてはあの怪しい沈黙の秒刻に譬へやうもない靈魂の歎歎をかりそめにも聴き逃さな

かつたヴェルレエヌの純一な氣分も恰度デリケートなかういふ心持では無かつたか。

珈琲の煙はとりもなほさず心の言葉である。匂である。色であり音楽である。而して溢くて苦い珈琲末は心の心、靈魂の生地。匙は感覺。凡て溶かして掻き廻す觀相の餘裕から初めてとりあつめた哀樂のかげひなたが軟かな思の吐息となつてたちのぼる。もの思はしい中に限りもない色と香の諸相をひき包んで六月の光線に美しい媚のあや糸を纏らす苦い珈琲の風味は決して自己を忘れたロマンチックな空の幻でも單純な甘いセン

チメントの歎きでもない。眞實、珈琲から珈琲の煙が立つやうに内心の深みから素直に心の吐息を搔き立たせてその融合渾沌のさかひに怪しい藝術の矜持と魔力とを物靜かに薫らし得る純一な詩人の歡會はまた何にもかへがたい眞言秘密の妙諦である。世に天才の名を恣にする人達の間にも眞にわが靈の匂を知り、言葉のかげひなた、ものの媚、色あひ、幽かな色觸香響の末の末まで嗅ぎわけて常に怪しい悲念にかき暮れ得る高貴な心の所有者は極めて少い。況して世のつねのかいなでびとが心をや。藝苑の中にしてなほ荒削りの珈琲末を悦び、但しは心と言葉の距離徒に

遠くしてそのみなもこの苦き香氣を忘れたつやもない思想家と偽りもの
の工人の世には多さよ。
珈琲、珈琲、珈琲の煙はまだ冷めもやらずにたちのぼる。紫いろの息
づかひ、ロダンの線畫……
乳酪の猫がまだ夢みるやうにその光つた尻尾の尖の細かな緑色の痙攣
を凝視めてゐる。窓のやうな入口からくわつと明るい銀座の通が見え
る、白日の輝き、濡れた舗石、柳の葉、そのかげの赤い草花の鉢、寄せ
かけた自轉車の銀の輪……

目に見えぬ空の何處かで花火が揚る。

そのうちにやや陰影の曇りを煙らした室内の光に懈怠^{なま}けはてた私の物思が今はもう珈琲の匂にさへ堪へがたいほどの疲れをおぼえる。而してただそこはかこなくアンダンテの夢の調子に墮ちてゆく。

私は思ふ、男をんなの夏の中夜の秘戯^{たはむれ}をかういふ晝の惱ましさにかろく描きつづけてゐた歌麿の氣持、まだ暮れもやらぬ晝の舞臺に黄色いラムプを點^{とも}す若い女形^{おんなま}の心持、白芥子の花に纏^{まと}る晝の幽霊、投げやりな晝間の三味線、湯上りの肌に匂ふあかい石竹、而して白日の光にうち揚ぐる

夜の花火の紅緑・翡翠・土耳其玉・銀光の紫……目に見えぬ星と寶玉の一悲劇、眩耀と消滅の夢。

而してまた公園の晝のアーケ燈を、白晝のシネマトグラフの瞬き、或は薄い面紗のかげに仄かに霞む人妻の愁はしい春の素顔を。

總じて明るい中の物の瞬き、幽愁の燻^いし、疲勞と陰影の薄笑ひ、眩暈中の杏仁水、それらから來る寂しさ、悲しさ、なつかしさ、さうした優しさ果敢^{さう}なさ溶^とましが私にはあの悲み極まつた純情の嗚咽、あらゆる觀念の寂び、綺羅を鏤めた美しい夜の横顔、或はサロメ女王の驕奢を盡

した踊の手さばきよりも却て染々とした歎息の推移うつりかはりを感せしめる。

涙を惜め、涙を惜め、高品なわかい心のそこひもわかぬ胸の秘奥に啜り泣けよ。芭蕉の寂びはまだうら若い私達わたくしが落ちつくところではない、少くとも世を樂しむメテルリンクの悲愁かなしみと神秘ミステックな蒼い陰影の靄の中に寂しい心の在所あちかを探す物馴れぬ Stranger の心持、その心を私は慕ふ。

乳酪の白い猫が幽かに軒をかきはじめた。その時私も靜かに女を呼んで一杯のウオツカを求める。この晝の暑さに無色透明なウオツカが小さ

なりキユグラスを透かして冷たい漣なみだを立てる。その投影がまたプリズムのやうに、頁を開いてあるモウバツサン集の黒い活字に細々こまごまと果敢ない染色をちらつかす。

ふと點の赤い i の字がひとつ眼につく。それが物憂げに動いて上の行の Chambre の b の字に匍くひ出し、しんみりと蒼い光を立てて斜めに Les enfants の L を横よこざり、もひとつ上の行の Passion の P に喰くひつくやうに留とどまつた。螢だ、疲れた小さな螢、點の赤い i の字、その尻しりを抓つかむと力のない人靈色の燐光が怪しい濕潤しつじゆんを放つ。私は何時しか幼い少

年の日の心に歌つた「おもひで」のあの螢の一聯を思ひ出した。

そなたの首は骨牌の

赤いヂヤツケの帽子かな、

光るこもなきその尻は

感胃のこころにほの青し、

しなれはてたる幽霊か。

透き徹つたウオツカと螢の赤い點、その冷たさ惱ましさ、私は染々と晝の螢に執着する。而してその銀の燵しをかけた蒼白い哀傷の光を愛する。

業平の高い調はまさに感じ易い夜の螢のセンチメントである。私達は時としてその繊細な平安朝の詠嘆、乃至は純情の雅びやかなる啜り泣き、若くは都鳥の哀怨調に同じ麗らかな心の共鳴を見出す事はある、而しなほ苦い近代の藝術にはまだその上に堪へがたいセンジュアルな日光の觸覺と濫い神経の瞬きとを必要とする。鍍銀の晝の燵しを必要とする。さもなくばアーク燈の眩ぶしい光のかげにあるかなきかに飛ぶ夜の螢の燐光を闇の夜のそれよりも更に哀れぶかくやるせないものに感じなければならぬのである。

午後二時過ぎ、螢はいつのまにか珈琲碗のかげにかくれて白い頁の
 PassionのPの字のみが強く強く光り出した。

乳酪の白猫がまだ睡つてゐる。晝寝から覺めた料理人が今また青い甘
 藍の球でも撈ぎとるのか厨の方で新しい野菜のにはひがすすろぐ。さ
 うして水道栓の水の滴り、誰かしら吹き鳴らす晝の銀笛……

私の氣まぐれな聯想はまた鮮な郊外の景色に手を振つてゆく郵便脚夫
 の白い帽子に飛んでゆく。ゴッホの野外の景色、段々畑の銀綠色に雨の

霽れ間の郭公が啼き叫び、白い葱の花のかげから出臍の兒が裸のまま
 笛を吹く……

凡ての因襲から放れ、馴れ過ぎた官能の愛着を断ちきり、而して更に
 新らしい驚異の銳感にやるせなきわれ自らの靈を慄かす近代の心にもな
 ほありしそのままの聲音に郭公は啼き、寂しい日本の笛は鳴る。ただ感
 ずる詩人の觸覺と、周圍の氣分の如何に依て古くも珍らしくも聽き做さ
 れるのである。

笛は鳴る、夜の笛より晝の音色のわびしさを、公卿の物の哀れよりも

彌さらに病兒の温かいその吐息を、私の神経は悲しむ、而して葱のあたりに縛るる白い羽蟲のやうに羽ばたく。

笛の音は何時の世までも滅びない、日本の笛の哀れさも何時の如何なる人の心にも染み込んでゆく。その笛本來の幽かな弱い寂しさは誰しもの胸の中に生れながらに秘められた純情のなげきである。高貴な内心の啜り泣き、やがては奔放限りなき管絃樂のそのみなもとである。

そのみなもとを悲しめ、而して至醇なそのみなもとの歌の氣稟をかりそめにも傷くるな、笛の匂を知れ、完成された大和歌の心根に更に悲し

い銀光の燻しをかけよ。ただ懐かしいその笛に強ひては殘虐な煤煙の濁りと工場の鐵の響を吹きかけるな。

私はただ馴れ過ぎた俗人ブルジョアの詠歎を忘む。されば日本の笛を取る心もちにもなほ鮮かな *Stranger* の驚異と感觸を貴み、目白僧園の鐘の音にアベマリヤの晚鐘を忍ぶ以太利亞旅人の春愁を悟り、異國の菊の香かきりに新しい流離の涙をそそぐピエルロチが秋の心をまたとなく懐かしむ。私はまた梅の木に鳴く鶯よりも腦病院の窓に鳴く鶯に泣き、定齋の軋みに驚く鶯に連れて驚く。有明の月に血を吐くほととぎすの悲歎を曾て見知ら

ぬ私は寧ろキャベツ畑の雨に啼く郭公を楽ししいものに哀れみ、昔ながらの古い前栽の繁みに飛ぶ螢よりも客待の人力車のかげに仄かに蒼白いお尻のバツチを光らす東京の螢をこの上なく今の心に親しむ。さりながら凡ての因襲から逃れて常に新しい官能の薄明りにわれどわが靈の在所をたづねゆくわかい旅人の心にも思ひ棄てがたきは日本の笛のあはれである。哀みのそのみなもと、純情のかの吐息である。

時が経つた。いつしか黄ばみかけた日の光のもとに、薄青いクローバ

模様の壁にかけた玩具の木時計が可笑しさうにお尻の分銅を動かして乍ら今三時を点つ。而して驚かされた乳酪の塊が椅子の上からすべり下り、料理人が細かに玉葱の庖丁を刻み、懶けたソファの物思が軟かに温かい欠伸をつく。

くわつとした入口の外の明るさ、自轉車が去り、草花の赤い鉢に静かに煉瓦屋根の投影が軽い塵埃と縋れる。

Quokoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

Gristchen, gristchen, tutch, tutch, tutch!

鳥屋が通る、くわつと明るい人道を車を曳いて。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

車の上の圓い四角な金網作りの、或は竹製の、大小さまざまの鳥籠、その鳥籠が六月の日に揺られながら蒸しかへるやうに光つてゆく。

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

Gristchen, gristchen, tutch, tutch!



時の明薄

一 放埒

一

美しくしきかなしき痛き放埒の薄らあかりに堪へぬころか

二

ものづかれそのやはらかき青縞のふらんねる
きてなげくわが戀

わがゆめはおいらん草さうの香のごとし雨ふれば
濡れ風吹けばちる

三

鳴きしきるは葦あしきり舌したうつは海うみさるにて
もせんや夜の明けがたのつれびき

アーク燈とう点ともれるかげをあるかなし螢せみの飛ぶは
あはれなるかな

四

なんぼ戀には身が細ろ、
ふたへの帯が三重まはる

なにそなく軍鶏しゃもの啼く夜の月あかりいぶかし
みつつ立てる女か

五

博多帯しめ筑前しほり、筑前博多の
帯しめて、あゆむ姿は柳腰……

すつきりと筑前博多の帯をしめ忍び來し夜の
白ゆりの花

六

ぬば玉の銀杏がへしの君がたほ美しくし黒し蓮
の花さく

七

ある遊女の部屋に薄い硝子の水盤があつた、
夏の夕方夜のひきあけひけすぎの薄いあか
りにほのかにウオタアヒヤシンスの花が咲
いてはまた萎れてゆくのであつた

水盤の水にひたれるヒヤシンスほのかに咲き
て物思はする



八

フラスコに青きリキユールさしよせて寝れば
よしなや月さしにけり

二上りの宵のながしをききしよりすて身のわ
れとなりにつむかも

九

毒草なれどもその花がすかに、
光あれどもその色さびし

雪の下白く小さく咲きにけり喜蝶が部屋の箱
庭の山

十

わかき身の感じ易さよ硝子杯の薄き鱒にも心
染みつつ

顔へ易く傷つき易き心あり薄らあかりにちる
花もあり

十一

鳥よ、鳥よ、宿場の小鳥、
廣重の海に飛べよ

木の枝に青き小鳥のとまりゐてただほれぼれ
と鳴ける品川

十二

年増のなげき一首

玉蟲の一羽ひと光りて飛びゆけるその空ながめを
んな寝そべる

II 踊子

一

惱ましく廻り梯子をくだりゆく春の夕の踊子がむれ

二

やるせなき春のワルツの舞すがた哀しくるほ
し君の踊れる

美しくきさいへかなしく愚かしき疲れつくる
と踊子踊る

紫のいたましきまで一人踊るスカートひざりの陰影かげ
に春はくれゆく

ただ飛び跳ね踊れ踊子現身うらみの沓くつのつまさき春
暮れむとす

三

たらんてら踊りつくして疲れ伏す深むらさき
 のびろうどの椅子
 あでやかに踊りつかれしさみしさか寝椅子に
 人を待てるころか

四

くろんぼが泣かむばかりに飛び跳ぬる尻ふり
 踊にしくものはなし

III 浅き浮名

一

戀すてふ浅き浮名もかにかくに立てばなつか
し白芥子の花

二

薄青きセルの單衣ひきえをつけそめしそのころのご
となつかしきひと

片戀のわれかな身かなやはらかにネルは着れ
ごも物おもへごも

三

茴香うんきやうさく

わが世さびし身丈みぢおなじき茴香うんきやうも薄黄に花の
咲きそめにけり

茴香の花の中ゆき君の泣くかはたれごきのこ
ちこそすれ

四

白き藤椅子をふたつよせてものおもふ
ひさのおだやかさよ。読みさせるはアル
ペエル・サマンにや、やはらかに物優しき
夕なりけり

さしむかひ二人暮れゆく夏の日のかはたれの
空に桐の匂へる

五

潮來出島の眞菫の中にあやめ
咲くさはしほらしや

かきつばた男ならずばたをやかにひとり身投
げて死なましものを

六

たんだ振れふれ六尺袖を

桐の花ことにかはゆき半玉の泣かまほしさに
あゆむ雨かな

七

すすかけの木さあかしやさあかしやの
木さすすかけさ鋪石みちのうす霧に

ほのぼのさと人をたづねてゆく朝はあかしやの
木にふる雨もがな

IV 蟾蜍の時

一

螢飛び蟾蜍啼くなりおづおづと忍び逢ふ夜の
薄霧の中



二

蟾ひきがへる 幽霊のごと啼けるあり人よほのかに歩み
かへさめ

ゆくりなくかかるなげきをきくものか月蒼ざ
めて西よりのぼる

三

鳥羽玉の夜のみそかごと悲しむと密かに墓も
啼けるならじか

寶玉のこよなき心とり落しよきひと泣けば墓
もまた啼く

四

いかばかり麻の畑の青き葉の身には染むらむ
人妻の泣く

人知れず忍ぶ心は鳥羽玉の黒き夜のごとかが
やきいでぬ

V 猫と河豚と

一

青柿のかの柿の木に小夜ふけて白き猫ゐるひ
もじきかもよ

二

白き猫膝に抱けばわがおもひ音なく暮れて病
むここちする

白き猫泣かむばかりに春ゆくと締めつゆるめ
つ物をこそおもへ

三

弓矢八幡寝はせれど寝たこ
おしやらばなませうぞの

夜おそくかけしふすまに匍ひのぼる黒きけも
ののけはひこそすれ



四

乳^{にゅうりよく}緑^{りよく}のびろうどの河^か豚^{とん}責^せめふくらし昨^{きの}日^ひも男^{おとこ}
涙^{なみだ}ながしき

河^か豚^{とん}よ河^か豚^{とん}よ汝^{なんぢ}は思^{おも}かし地^ちに跳^はねて冲^{おき}津^つ玉^{たま}藻^も
の香^{かほ}のなげきする

VI 路上

春

いそいそと 廣告燈も廻るなり 春のみやこのあ
ひびきの時

夏

白耳義新詩人のものなやみは静かにし
てあたたかく芭蕉の寂はほのかに涼し

かはたれのロウデンバツハ芥子の花ほのかに
過ぎし夏はなつかし

水路

空見れば圓弧燈に雪のごと羽蟲たかれり春よ
いづこに

薄暮の水路にうつるむらさきの弧燈の春の愁
なるらむ

新橋

新らしき匂なによりいとかなし勸工場のぞく
 五月のころ
 人力車の提灯^{かん}つけて客待つとならぶ河邊に螢
 飛びいづ

銀座

薄^ああかり紅^{あか}きダリヤを襟にさし絹帽^{シルクハット}の老いか
 がみゆく

夏よ夏よ鳳仙花ちらし走りゆく人力車夫にし
 ばしかがやけ

おそ夏

折ふしのももの流行はりのなつかしくかなしけれ
ばぞ夏もいぬめる



兩國

萬歡夢のごとし

青玉のしだれ花火のちりか
かり消ゆる路上を
君よいそがむ

初秋

夏の夜の牡丹燈籠の薄あかり
新三郎を誰か殺せる

ちりからと硝子問屋の燈籠の塵埃ほこり
うごかし秋風の吹く



きさどあの雨

I 雨のあこさき

一

新らしき野菜畑のほととぎす背廣着て啼け雨
の霽れ間まを

キヤベツの段々^{だん}畑^{はたけ}銀緑なり雨霽れ空に白雲の
湧く

あまつさへキヤベツかがやく畑遠く郵便脚夫
疲れくる見ゆ

二

入日うくるだらだら坂のなかほどの釣鐘草の
黄なるかがやき

窓ぎはの男の頬のみ明^あう見せ釣鐘草の中を汽
車ゆく

三

酒場の夏

夏帽子瀟洒につけて身をやつす若き紳士の白
百合の花

四

夏の日はなつかしきかなこころよく梔子ゆずりの花
の汗もちてちる

きりぎりすよき淫なまれ女めがひとり寝て氷食む日
となりけるかな

五

やるせなき淫みだら心となりにけり棕コ栲クの花咲き
身さへ肥ふ満みれば

黒き猫夜は狂くるほしくかきいだき五月う蠅るきもの
に晝はは跳はねやる

六

桐の花ちるころ

人妻のすこし汗ばみ乳をしぼる硝コ子ツ杯ツのふち
のなつかしきかな

七

梅雨くるまへ

栗の花四十路過ぎたる髪結の日暮はいかにさ
びしかるらむ

八

あかしやの花ふり落す月は來ぬ東京の雨わた
くしの雨

検温器けんおんきかけてさみしく涙ぐむ薄き肌あり梅雨つゆ
盡きすふる

二階より桐の青き葉見てありぬ雨ふる街の四
十路そぢの女

七月やおかめ鸚哥いんこの啼き叫ぶ妾宅の屋根の草
に雨ふる

色硝子暮れてなまめく町の湯の窓の下もとなるご
くだみの花

湯上りの好すいた娘がふくよかに足の爪つま剪きる石
竹の花

十

長雨ながあめの蒼あさくさみしく淫なまれてしその日かの日も
いまは戀しき

長雨のあとのところにひるがへり孔雀火のご
と鳴く日きたりぬ

十一

新らしき皮膚の痛いたみかたましひの心しんの汗より
來るなげきか

たもちがたきころとこころ薄ら青き蝗のご
とく弾ねてなげくや

十二

憎きは女、戀しきもまた女

憎惡にくしみのこころ夏より秋にかけ
茴香の花の咲く
もあはれや

十三

晝見えぬ星のこころよなつかしく刈りし穂に
凭り人もねむりぬ

あかあかとあひる鷺卵を置いてゆく草場のかげの夏
の日の戀

十四

夏の日
は女役者のものごしのなまめかしさに
似てさびしけれ

紫の日傘さしかけ憂^うき人ののらりしやらりと
歩む夕ぐれ

十五

やはらかに夏のおもひも老いゆきぬ
中年の日の君がまなざし